

息をする

息をするだけに苦しい
見えぬ放射能が町に村に
降っている

垂れ込めた雲の下に広がる
瓦礫の散乱
瓦礫が散乱する空地

もとよりここは
空地などではなかった
店が繁盛し

町工場が並び
家々では穏やかな日々を
紡いでいた

父がいて母がいて

歩き始めた赤ん坊がいた
嫁入り前の娘がいた
罫鏝と生きる古老がいた

彼らの多くは
ひしゃげた屋根の下や
数キロの沖合で
見つかった
もはや

息をしない姿になって

二十一年三月十一日の
十四時四十六分十八秒の直前まで
誰もが見慣れた明日がくるものと
当然のごとくに思っていた
全く普通に

息を通わせながら

瓦礫の散乱する広場では
なにもかもが
あまりにも生々し過ぎて
何とか逃げおおせた人々も
胸苦しくて
息が出来ない

見えぬ放射能が
降り注いでいるからなのか
親を失い
子を失い
仕事を失い
歩こうとする道を
見失ってしまったからなのか

地獄かもしれない
これが

地獄の景色なのかもしれない

涙も涸れた
言葉も出やしない

復興という旗を立て
懸命に息を吸い込み
必死に歩き始めようとする

一歩を進むことしか
いま
なす術はない

地震

マグニチュード九という巨大地震が
東日本を襲った

震度七というとても揺れは
家を壊し、ビルを壊し、道路を壊し
線路を壊し、山肌を削り、人を倒した

巨大地震に怯んだところに

十五メートルも、二十メートルもの
狂った津波が追いかけてきた

船を陸に運び上げ、栈橋を易々と越え
魚市場を、加工工場を、郵便局を

半壊した建物を、地震には耐え得たビルを
逃げまどう車を、避難指示のスピーカーを
子供の群れを、寝たきりの病人を
結婚間近の乙女を、背中に負ぶさった人を
田を、畑を、ビニールハウスを

猛烈な勢いで呑み込んだ

原子力発電所にも激しく襲いかかり
安全の砦だと標榜していた
建屋を浚い、機器を押し流し
電源を引き千切った

残されたのは

瓦礫の山のほかには何も
なくて、街だったに違いない跡が

家が、車が、船がガラクタとなり運ばれ
完膚ないまでに、無造作に打ち捨てられた

動けない老人も、働き盛りの男や女も
妊婦も、学生も、消防職員も
町の相談役も、観光客も、外国の人も

情け容赦なく

津波の気の向くままに呑み潰された

すんでのところを命を拾った人々は
避難所に押し込まれ

身を切る寒さと、理不尽なまでの絶望に
体を寄せ合って耐え

止むことのない余震に心を刻まれた

安全を標榜してきた原子力発電所は
水素爆発を繰り返し

建屋は飛び、炎や煙を立ち上らせ
炉心が溶融したのか

夥しい放射能を撒き散らす
悪魔の住処となり果てた

地震や津波に想定外はつきものだ
燃えたぎるマグマの上のなんとも薄い
マントルの上に住んでいるという

危うさを

先ず考えねばならない
筈であるのに

人智による安全宣言など
果たしてあり得るのか

出来ることなら

あの瞬間の直前に
時間を巻き戻してもらいたい

夫や、妻や、幼子や、父や母たちを
しっかりと取り戻したい

もう一度この手に抱き留め
ひとその感触を肌を感じたい

津波

真昼の海が
突然断崖を突き立てたさまに
盛り上がり
白波を蹴立てて
押し寄せ
堤防の上を軽々と越えた
ひどくゆったりした
スピードであるのかと
みせながら

海沿いの店が
加工工場が
船が
次々と浚われていった

川の流れを押し返し
上流へと向かった白波は
橋を
商店街を
郵便局を
病院を
教会を
寺院を
工場を
家を流し

田を
畑を
ビニールハウスを
木々を
路を浚い

車の列を
逃げ惑う人々を
園庭に集合した子供たちを
飲み込み

断末魔の
音声を発することも
救いを求めることも
念仏を唱えることも忘れ
呆然と立ち竦むばかりの
人々を尻目に

緊急避難放送の声を
断ち切り
おうおうと呻くばかりの
人々の胸の温みを
引き千切り

わうわうと驚くばかりの
狼狽えるばかりの
泣き叫ぶばかりの
その場にくずおれるばかりの
人々を尻目に
白波はアメーバ状に
増殖し

引き裂き
流し
浚い
巻き込み
放り捨て
底知れない暴虐の
限りを尽くし
この世のものとも思えない
殺戮の場を
白昼の元につくり出した

原 発

平和の使者と名乗っていた

原発が

爆発した

作物も土壌も

人間も牛も馬も

犬も猫も

海も魚も

貝もわかめも

悪魔の息を吹きかけられ

大震災に大津波という
事が事とはいえ

平和の使者の正体は

核分裂だ

放射能だ

降り注ぐ放射能の元では
息することが出来ない

人間の制御のもとにある

と信じて疑わなかった原発が

いったん野に放たれるや

悪魔の姿に早変わり

放射能自体目に見えない

ものだから

疑心暗鬼が横行する

風評が勝手に歩きまわる

空気も水も

たまったものではない

政府も電力会社も御用学者も

勝手気儘なことをいい

肝心なことは漏らさないから

信じるものがない

何を信じてよいかわからない

全く下劣過ぎはしないか

とても

真つ当な人間のすることでは
ないだろう

これは悪魔の仕業ではないか

この期に及んで

まだ利権に目が眩む奴がいる

弱き者たちの声を聞け

丸腰の者たちの嘆きを聞け

彼らの今を

将来を

放っておいて

会社がどうの

組織がどうの

俺の手柄がどうの

党派がどうのなど

満ち潮引き潮

満ち潮に生まれ
引き潮に死ぬのだと
いうけれど

満ち潮も引き潮も
あったものか

遙かな彼方から

鉄の固まりにも似た潮が

すさまじい速さで

すさまじい勢いで

走り来て

町を飲む

寄せ来る波に流され

引き戻す波に浚われ

一人一人の命が

一つ一つの命が

マツチ棒よろしく

無体に

吹き消されていく

満ち潮に生まれ

引き潮に死ぬのだと

いうけれど

逆さまなのか

めちやくちやなのか

わからない

わかりやしない

去年と今年

去年と今年とでは大きく違う

大震災のせいだ

明日が来ることさえ信じ難くなった

薄明かりが射し

小鳥の囀りがあちこちから聞こえ

朝靄があがり

朝刊配達バイクがやって来て

郵便受けがコトンと鳴る

日射しが強くあたりを照らし

だんだん穏やかな光となり

玄関が開かれ

ヘルメットを被った

子供たちが飛び出して来る

夕日の中

子供たちが賑やかな足音をたて

通りを戻って来る

手に手にヘルメットをぶら下げて

今日が来た

今日が終わった

なんと何気ないことなのか

こんな何気ない日々が

これまでずっと過ぎて来たことに

立ち止まり

頭を垂れ

明日もちゃんと来てくれるよう

願うばかりだ

楽観主義

今日がやって来た
今日が過ぎていく
それが嬉しい
それだけで嬉しい

眉を蹙ませ
口を尖らせ
目を逆さにし
算術にかまけるより

ほんの一回
空を見上げ
笑うだけでいい
ほんの一回
うんと空気を
吸い込んでみる

だけでいい

なんの計算もなく
海山に向かつて
笑いかける
だけでいい

地が揺れるかも
しれない
空に激しい雲が流れる
かもしれない

それはそれ
相手の目を見詰め
微笑み返す
だけでいい

緑深く

今年の新芽の色は緑が濃い
ツバキ、サザンカ、カキなどの葉は
緑というよりも黒緑に近い
日射しを十分に浴びて
ぶくぶく太っている

ニュースで報じられた新茶の葉も
丸々とした健康優良児の
そのものだった

放射能汚染が限度を超えているから
使い物にならないという新茶の葉が
野菜、果物、牛乳、魚介類のどれもが
いつの年にも増して
健康そのものだった

目に見えない放射能という悪鬼が
悪戯の限りを
尽くしているのだろうか

先の見えない
断崖絶壁に立つ今であればこそ
木々の緑はあくまでも深く
日射しに煌めき翻り
渾身の力で

精一杯の花を開かせて
いるのだろうか

三分間の路標

地球が誕生して四十五億年
生命が誕生して三十五億年
人類が誕生して五百万年
前カンブリア時代、古生代
中生代、新生代と続く地質年代
四十五億年が長いのか長くないのか
三十五億年はどうか
五百万年はどうなのか
前カンブリア時代とはどんな時代か
古生代は、中生代は
新生代とはどんな時代か
地質年代のそれぞれに
科学のメスが入れられてはいるが
菌や、藻のごときものが生まれ

植物が生まれ、酸素が生まれ
オゾン層が生まれ
岸辺に植物が這い上がり
動物が植物を追いかけ
それらが地球上で繁茂し
というあたりが約五億年前から
三億年前のことだという
かの擽猛で巨大な
恐竜の先祖が現れたのが
およそ二億五千万前といい
大地を我がもの顔にのし歩いた後
絶滅したのが
六千五百万年前だという
恐竜に虐げられていた哺乳類が

ようやく頭をもたげ始めたのも
六千五百万年前あたりであるらしい

人類五百万年目の昨日今日の路標を
どう定めめぐらせればいいのかろう

人類の先祖が現れたのは恐らく新生代の
最後の最後あたりであろうから
人類もたいがい疲れ果てたであろう時期の
紀元前四千年に文明誕生という
歴史教科書の太字の字句が
どうにも霞んで見えてしまう

地質年代によれば
大陸は一つに固まっていたこともあり
引き裂かれたり、隆起したり、沈んだり
北極と南極が逆転したり
陸が増えたり、海が増えたり
海の塩辛ささえ変わるのだという

固有の領土だ、排他的経済水域だ
圧政からの解放だ、私服を肥やすな
などというのが昨今の大問題であり

これまで時代が過ぎゆくたびに
生命は、少なくとも数度の絶滅を
経験してきた筈だともいう

銃弾が無闇に飛び交っている
哺乳類の中の、ホモサピエンスの、民族の
権威や主義やメンツや利権や利害などが
最大の問題であるらしく
どう考えたらいいか
どう折り合いをつければいいのか

地球誕生から現在までを一年に例えれば
文明が誕生したのは
十二月三十一日の二十三時五十七分あたりに
位置するらしい

つい三分前に
文明をもったという人類の
日々の生業が
万物の霊長などと己を持ち上げ
目映いばかりの宮殿をこしらえ
黄金にあかせた衣を纏い
権威者のごとく訳知り顔に振る舞い
千万の奴婢を従わせ
雲を突き抜けるほどのタワーを築き
容赦なく銃弾を撃ち込むことに
現を抜かすという様のままに
あればそれでよいのだろうか

雨の博物館

眠っているうちに
雨になったりする
眠っているあいだは
時計の針が
どこを
どう回ったかしらない
だから
眠っているうちに
降り出した雨は
三年前のものとも
三年先のものとも
判然としない
濡れとおってやってきた
今朝の新聞は

蒙古来たる
であつたり
木星の輪消える
であつたりする
外はいつのまにか
雪にかわっていたりする
三年前の雪か
三年先の雪であるのか
黴くさい
線香花火まがいの雪は
間断なく
今も降りやまない

楯円軌道

中心がある
確たる中心がある
光輝く中心がある

ものたちが中心を見上げ
中心に向かい
一寸でも近付こうとする

中には
中心があることさえ
知らず
中心があるろうと
中心がなかりろうと
知ろうとすることさえ
しないものも
いるが

ものたちの全てが
中心の周りを
凄いスピードで
あるいは

遅々とした歩みで
巡っている

中心のあることを
知るものも
中心のあることなど
知らないものも
中心に向かい
一寸でも近付こうと
いう恰好で

大慌てで

あたふたと周りを
巡るものだから

あたふたと
飽くこともせず
巡っている

完璧な円には
ほど遠く
ゆるやかな
間延びした
あくびの出そうな

奇天烈な
円弧を描きながら
手を振り
足を下タバタなびかせ
中心の周りを
寄せる波のごとく
ザッザッ
サーンザッザッ

大慌てで

二〇一二年問題

地が揺れる
地が割れる
山が火を噴く
山が裂け落ちる
海が躍り上がる
海が陸地の上に駆け上る
水が走る
水が狂い暴れる
空気が焼け付く
空気が失せていく
紙幣が紙屑になる
紙幣がゴミ箱に溢れる
墓が草に没する
墓が斜面を転げ落ちる
食料がない

売り場にも畑にもない
強奪事件発生
芋蔓を奪い合つての強奪事件
人心が乱れる
あくどい者が勝利する
束の間を勝利する
火の雨が降る
骨の芯まで焼かれる
天のものが一気に下る
地のものが濛々と上る
暗闇になる
三日三晩太陽が昇らない
テレビもない

カオス（混沌）の老

ラジオもない
車もなければ
道路もない
あがいても
あがいても抜けられない沼
誰もいない
誰もいない
誰一人呼びかける者もない
マヤの警告
太陽の異常活動
天体の接近
地軸の逆転
宇宙自身の生命活動の
一端である
のだともいう
海の死
大気の死

ものたちの死
屍の影も残さず焼き尽くす
原子の火
原初のエネルギー
二〇一三年の日が
昇るとすれば
この阿鼻叫喚の時が過ぎ
暗黒の長い時が過ぎ行かねば
ならないとされる
もうそこが近付いている
もうそれは間近にある
もう時間はない
ぶすぶすと煙は
上り始めている
そこら中が燻り始めている
らしいのだという

彼岸と此岸

この世界の生活に思い悩み
苦しんでいるとき
ひょいと自分の中心を
彼岸にいる自分とすり変える
見える角度が三百六十度
以上にも広がり
展開するのだから
痛快だ

かつての自分の愚かしい
ことも見えてくる替わりに
何も思い悩むことなど
ないことだって見えてくる
彼岸と此岸

笑ったり泣いたり
怒ったり恨んだり
我を貫いてみたりするのも
此岸の特権なのだから
おおいにやればいい

どちらが本拠地であるのか
わからないが
一瞬の間に星さえ飛び越えて
しまふ彼岸が
此岸より劣っている
とは思うまい
カプセルの中に埋もれているに
等しいという此岸

此岸も彼岸も
今は今に違いなく
此岸でやるべきことは
たんとあるのだから
彼岸の自分に頼ることは
今はまだ愚かしい

ナガサキ今

六十五年前の夏

この地の上空で

二発目の火球が炸裂した

その瞬間に

ヒトは溶け

ヒトは焼け焦げ

ヒトは異形のものとなった

放射能という

全てを焼き尽くし

全てを突き抜け

全てを狂わせてしまう

宇宙の始原の内に潜んでいた

異端児が

子供の上に

母の上に

少女たちの上に

老人たちの上に

若い兵隊たちの上に

情容赦なくのしかかり

灼熱の閃光を浴びせた

イヌやネコやウマや

学校や工場や鉄塔や

石組や塑像や瓦や線路や

そんな形あるものを

破壊し尽くすばかりではなく

心の芯までを引き裂き

阿鼻叫喚の

真空地帯に

変えてしまった

六十五年を経て今

ナガサキの坂道には

マップを片手に

アベックや

修学旅行生や

外人たちが

上ったり下ったり

笑い合ったりする

しかし

宇宙の始原の内に潜んでいた

異端児が

そう簡単に遁走したとは

とても思えない

天を指さし

左手を水平に広げ

平和を祈念する像が立ち
溢れるほどの噴水が上がる街の
片隅に

もしかしてまだ

かの異端児がひっそりと

潜り込んでいないとは

限らない

亜熱帯化

南の国の植物が育つんですよ
店先での立ち話だ

名前はなんだったか

確かに南国の植物らしい

木肌が柔らかくて伸びやすく

葉もてっぺんに大きく開いて

いかにもおおらかな風情だ

北限だとかの難しい

ことはわからないけれど

種をカウンターの水に

浸けていたら

ぐんぐん伸び出したという

子供の頃からすれば

二、三度は上がってますよ
三十五度を超えるなんて
昔はなかったですからねえ

店の婦人は汗を拭き拭き

馴染み客との立ち話に

余念がない

気温も変だし

スコールまがいの雨が降る

稲妻の走りも激しい

おまけに電気事情が悪いので

空調温度を高く設定しているのも

一因でしょうけどねえ

婦人たちの立ち話は

尽きないが

亜熱帯化しているというのは
的を射ているかもしれない

両極の氷が溶け

何度も何度も

地が揺れ動いたりしている

地軸が妙な具合に

傾き始めていたりしても

おかしくないのかもしれない

風に吹かれて

都府楼跡の礎石に腰をかけ
指の丈ほどに伸びた原っぱの草が
風に吹かれるさまを眺める
薄緑色の草は細い糸に似て
湿った西風が吹きかけると
サワサワサササとこぞって東に靡く

夕方七時を過ぎ
無人の原っぱはがらんどろに広い
雲を低く走らせ
サクラやモミジの木々を翻らせ
西風はなにゆえか
微かな憂いを携えていて
原っぱの草群に寄りすがるかの体に
吹きかけている

千年の雨風に打たれ
鋭敏に研ぎ澄まされた
礎石の魂の震えを通して
なんでも
聞くことができる

いま悲しくはないかい
どこまで行くの
あの山を越えてもう一つ山を越え
行きつ放しなの
今度東から西に向け
雲が流れ始めるときまではね

暮れ落ちていくなか
礎石に腰を降ろしていると
西風のことばも草のことばも
手にとるほどに聞こえ
湿った西風が抱え込んでいるらしい
憂いのさまも
指の丈ほどに伸びた草たちの
けなげなさまも

初夏そよぐ

午後七時を過ぎても明るい
観世音寺から戒壇院を回り
裏道を歩く

西日が正面にあり
まぶしさに帽子の庇を下げ
肌に心地よい風を浴び
都府楼跡へと向かう

菖蒲は花を終え
紫陽花も主役の座を
降りたばかりだけれど
庭の隅にシヤラの花が
ひっそりと白い顔を見せ
石垣の中頃に
ドクダミの群生が
あつたりする

折からの風になぶられ
トウカエデの繁りが
いい気持だよと
鳴るばかり

ゆつくりと光る風に
向かい歩みゆくと

公民館のあたりが騒がしく
光が窓ガラスに揺れ
ドアが何度も開かれては
閉ざされる

側溝を流れる水が澄んでいて
小さな音を奏でながら
かなりの早さで流れ
水草を楽しませる

都府楼跡の原っぱには
まるで人の姿はなく
伽藍跡を四王寺方面に向かい
歩けば

魂魄

私は魂であった
魂と呼ばれるものであった
雨が降り続いていた
雨は嵐に変わっていった
蛇を怖れている
蛇の纏れ合っている姿が怖い
それでも蛇を見たかった
とぐろを巻き
威嚇してくる蛇の
あの脂ぎるほどにぬめった
肌を感じたかった
夜明け前であった
雨は霧雨となって
空に向けて降っていた

確かなものなどない
確かなものなどないのだ
と宙に留まった私の魂は
いま放出された精液に射抜かれ
しとど濡れていた

確かなものなどない
確かなものなどない
と宙に留まった私の魂は
そう叫ぶ声を聞いていた
狂おしいほどに
のたくり蠢く蛇の様を
眼下に見ながら
生まれたままの姿で
男と女があられもなく
纏れ合いまさぐり合っている
のだと知っていた
夜明け前であった
雨は霧雨となって
空に向けて雪崩れていた

自由無碍

宙空間を自在に飛んでいた

という記憶がある

時間の隔たりも

こちらから向こうへの

障壁もなく

自由自在に飛んでいた

夢であるのか

現のことであるのか

どう考えても現のことと

しか思えない

つい昨日のことであり

いや明後日あたりのこと

である筈で

昨日と明後日が

どちらが先で

どちらが後のことかも

こんがらがってしまっただが

どこにでも行けるし

どこからでも現れることが

できた

飛んでいるときは

飛んでいることが当たり前で

あったから

今、飛行機などという

不自由きわまりない

奇天烈な檻に閉じこめられ

飛ばねばならないとは

文明も落ちたものだ

と嘆息して

我に返ったものだ

我に返る間際のこと

もう一つある

会いたい人や

会いたいことや

会いたい自分に

願ったときには会っていた

不平のままを言っている

今の自分にも

宙の彼方の星雲のあたりに

漂っていたときの自分にも

フィヨルドに生えた

一面の苔の下に住んでいたときの

自分にも

いつでも会っていた

言わざる

見ざる、言わざる、聞かざる
とはよく言ったもので
特に、言わざるというのは
金言の類だ

ことばを巧みに操り
恋も、出世も、商談も
果たすのが習いであるが

言えばあたりの空気を乱し
神経まで刺してしまうという
輩がいる

というのはほかならぬ
自分もその一味で
たわいのないことを言った

つもりが
相手の肝を握りつぶすという
ことになってしまいうらしい

普段ものなど言わぬ奴が
言わぬくせに
言えぬくせに

ズドンと腹にめり込む
類のことを言うなどとは
無礼千万
お門違いもはなはだしい

などとなるからややこしい
冗談のつもりが冗談ではない
となると悲惨だ

言わざるを決め込む
言わざるのポーズをとる

言わざるをいいことに
四方から八方から
礫となって言葉が飛んでくる

言葉がチクチクと
ぶんぶんと飛び交う

言わざるのポーズの主は
聞いても見えず
見えても聞こえない
石ころになる高等な術を
よくよく
心得おく必要がある

あめんぼう

なさねばならないことが重なる

あせってしまい

一つに嘴を入れ

違うやつにも嘴を入れ

何もかもに嘴を入れ

前後見境なくスタートするのは

いいとして

一週間が経っても

何一つ片付いていないことに

はたと気付く

どれもこれも期日が切迫して

いるから

あめんぼうを真似てくるくる回り

気持だけは激しく急ぐのだが

よけいに混乱してしまう

一つ一つということは知っている

一つを片付け

次にまた一つという具合だ

わかっているけれど

期日は待ってくれない

あめんぼうの仲間を呼んで

くるくるくるくる

くるくるくるくる回る

二週間が経っても

何一つ片付いていないことに

気付き凍り付く

今更一つ一つもないだろうなと

悲痛な叫び声をあげ

もう一匹のあめんぼうまで呼び寄せ

くくくくくくくく

くくくくくくくく回って

無有恐怖

心をおおう煩悩が消えると
無有恐怖になると

般若心経にうたわれている

煩悩という

そのものからして

よくわからないのであるが

煩悩に満ち溢れた日々を

送っているであろうことは

十分承知だ

煩悩を消す

煩悩に囚われない

そう考えると

気が遠くなりそうで

途端にしゃがみ込んで
しまう

雪が降っている

綺麗だな

と感じるのも煩悩の

仕業だろうか

田舎から餅が届いた

気をかけてもらって

ありがとう

というのも煩悩の

仕業だろうか

てやんでえ

俺の仕事のどこが

まずいんだ

感覚の違い、方法の違い
に過ぎないだろう

という手合いは

もうまさに煩悩の仕業

であろうと思われる

がどうあれ

日々無有恐怖にならない

ところをみると

自分のありとあらゆる

ところが

煩悩の海にどっぷり浸り

暮らしていると

いうのだろう

朝刊

ラッシュアワーの電車が止まると
駅の改札口に向けて殺到したのは
刷り上がったばかりの
朝刊たちだった

それらのどれもが
人類滅亡迫る
という危機的なスクープを
得意満面に一面トップに
掲げていた

改札口では
駅員たちが何のためらいもなく
アトムやドラえもんたちの手から
切符を受け取った

反作用

ねばならない
ねばならないと
言われ続けると
そしりの言葉の
エネルギーは
大きすぎるから
ねばならないの
反対方向に
ベクトルを
向けてしまうことになる

引っ張ろうとさえ
引っ張ろうと
すればするほど
反する力
つまり反作用の力が発生し

正比例して
強くなるから
正比例してとてつもなく
強くなるから

反作用のことを
よく知る人は
黙って
ただ抱きしめてやる
それだけが
それこそが
なすべきことの全てなのだ

めまい

わたしは

あおぎめたとおい

宇宙を知っている

わたしは

めくるめくしらしらした

星たちのゆらめきを

知っている

あおぎめたとおい

宇宙は

実は

わたしたちの内であり

いとも簡単に

手の届くところにあるのだ

ということ

知っている

わたしは

実は

星たちのゆらめきは

わたしたちの胸の内や

わたしたちの三半規管の奥や

わたしたちの目の玉の上に

シャボン玉のかたち

に浮いている

のだということ

知っている